OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞小田実（著）『被災の思想 難死の思想』：「私」と「私」の共生はいかに可能か
Author(s)	宮本, 匠
Citation	災害と共生. 2019, 2(2), p. 51-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71127
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小田実（著）『被災の思想 難死の思想』朝日新聞社，1996 年 4 月刊，649 頁
―「私」と「私」の共生はいかに可能か―

宮本匠[1]
Takumi MIYAMOTO

１．「私は、ダニエル・ブレイク」

「人生は変えられる。隣の誰かを助けるだけで。」イギリスの名匠、ケン・ローチ監督が引退宣言を覆して撮影し、彼の生涯2度目のカンヌ映画祭パルムドール（最高賞）に輝いた2016年の映画、「私は、ダニエル・ブレイク」の日本公開版ポスターにはこのような言葉が踊っていた。確かに、この映画では、イギリス、ニューカッスルで長年大工として働きながら、足場からの落下事故をきっかけに福祉制度に翻弄される羽目になるダニエルと、シングルマザーのケイティの出会いと交流が描かれている。しかし、この映画が描いているのは、冒頭のキャッチコピーのような個人と個人の助けあいの可能性ではなく、むしろその不可能性、限界である。

エスピン・アンデルセンによる有名な福祉国家の類型において、イギリスは自由主義レジームに位置づけられる。かつては「ゆりかごから墓場まで」という言葉で表されるような手厚い公的福祉制度で名を馳せたイギリスが、なぜ福祉の供給源として市場を重視する自由主義レジームを代表する国家となったのか。そこには、1980年代にマーガレット・サッチャーによって推し進められた、「小さな国家」を標榜するサッチャリズムによる徹底的な福祉国家の解体がある。そのサッチャー以来の緊縮財政を推し進めたのが2010年代のデビッド・キャメロンだった。キャメロンは、サッチャリズムにおいては少なくとも国家ビジョンのひとつの形ではあった「小さな国家」という「理想像」をめざすのではなく、「10%カット」というような「数字」を端的な目標として、財政を切り詰めようとした。その結果、イギリスに一体何が起きたのかを描いているのが「私は、ダニエル・ブレイク」である。

ダニエルは、心の病に苦しんだ妻を介護し、看取った、一人暮らしの男性である。妻の介護による長年の心労がたまっていたのだろう、ダニエルは仕事中に心臓発作を起こし、足場から落下。医師からは働いてはいけないと忠告を受けながらも、役所から「就労可能」と判断されたために、手当を受け取れなくなることからダニエルの混乱は始まる。

手当を支給してもらうためにたらい回しにされながら役所と交渉することは、ダニエルにとって、役所との戦いというよりも、むしろ自らの尊厳との戦いである。例えば、雇用支援手当を受けるための審査での電話のやりとりはこうだ。「電話のボタンは指で押せますか」、「悪いのは指じゃなくて心臓だって言ってるだろ!」、「簡単な事柄を人に伝えられないことはありますか？」、「ある！心臓が悪いのに伝わらない」、「最近、大便を漏らしたことは？」・・・。

そんなダニエルが、同じ役所で、バスの遅延によって約束の時間に遅れたばかりに支援手当を受け取れなくなったケイティ親子を助けようとするところから両者の交流が始まる。ケイティには、父親の違う2人の子ども、姉のデイジーと弟のディランがいる。ケイティ家族の家はボロボロで、ダニエルはこれではダメだと、大工の腕を活かして改良していく。ダニエル手製の植木鉢とろうそくを組み合わせた「ストーブ」の火が部屋をやさしく暖めるとき、役所との交渉で失われたダニエルの尊厳も取り戻されつつあるようにみえる。

２．ひとりひとりの支えあいの果て

そんな4人の前に現実は厳しく立ちはだかる。ダニエルは、オンライン申請に必要だとされるパソコンのビープ音にあしらわれたり（人員削減のためさまざまな手続きが民間に委託されたりオンライン化されている）、履歴書の書き方講座の受講を義務づけられたり、挙げ句の果てには、就労の意思をアピールするためだけの架空の就職活動までしなければならなくなる。

ケイティたちの暮らしも順調とは行かない。「掃除請け負います」と書かれた手製のチラシを投函してまわるケイティだが、思うような収入を得ることが出来ない。お腹を空かせた子どもたちに夕食をゆずり、ひとりリンゴをかじるケイティ。

そんなケイティ親子がフードバンクに行くのにダニエルが同行する。フードバンクとは、困窮者のた

*1 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科　専任講師
Lecturer, Graduate School of Disaster Resilience and Governance, University of Hyogo

めに寄付された食品を無償で配布する活動だ。フードバンクの前には長い長い行列が出来ていた。ケイティのような親子は決して珍しくないのだ。フードバンクのスタッフは、彼・彼女らを翻弄してきた役所の窓口の人々とは正反対の、とても優しく人間味あふれる人たちだ。だから、母親が、棚に並べられた食料品を眺めている間、子どもたちはビスケットとジュースを与えられて待っている。「生理用品はありますか？」とたずねるケイティに、「ごめんなさい、必要なのに寄付がないのよ」とこたえる女性スタッフ。次の瞬間、ケイティは棚に並べられたスープの缶詰をあけて、衝動的にすすってしまう。情けなくて泣き崩れるケイティを抱き寄せるダニエル。

追い込まれたケイティは最後の手段を選ぶことになる。最後の手段を選ばざるを得なくなった理由もまた、最後の手段を選ばざるをえない母親としての最後の理由だ。それでも救おうとするダニエルの手をケイティは振り払う[1]。

「私はお客さまでも顧客でもユーザーでもない」から始まる「私はダニエル・ブレイクだ」というメッセージのラストシーンは、この映画を通してケン・ローチが伝えたかったことをまっすぐに投げかけてくる。ひょんなことをきっかけに、社会からふるい落とされた人々が互いの尊厳を賭けながら、何とかつながりを見出して生きようとしたことを待ち受ける残酷な結果がそこにはある。

ダニエルとケイティ、デイジーとディランの4人が並び立ったこの映画のポスター写真はさながら家族写真のようである。この血のつながりあわない「家族」は、優しい愛でつながり、互いを慰め、支えあいながら、崩壊していく。生き延びていくために取り結ばれた「家族」関係が、その関係自体に喜びを見出しながらも、やがて限界を迎えていくさまは、「私は、ダニエル・ブレイク」の翌々年に、やはりパルムドールを受賞した是枝監督の「万引き家族」と重なるところがある。「万引き家族」のポスター写真も、やはり家族写真のようだ。もちろん、これらは偶然ではない。場所は違えど、サッチャー、レーガンに続いた80年代の中曽根康弘、そして2000年代の小泉純一郎の「構造改革」のなれの果てがそこにあるという必然である。

３．共生を可能にするもの

地縁や血縁のしがらみから解き放たれて、自由な選択に基づいた人生を謳歌する現代社会を生きるひとりひとりの市民は、あるとき、その自由のもろさを知る。ダニエルのように、健康を失ったときもそうだろうし、災害にあうということも大きなきっかけのひとつである。災害と共生ということを考えたときに、災害時においても、ひとりひとりの市民の自由な意思による助けあいが、その共生を十全に可能にすると言えるだろうか。そこから漏れ落ちるものはないのだろうか。個人と個人の助けあいの可能性と不可能性を私たちはどのように見極められるのだろうか。作家・小田実は、この問いに被災地の真ん中で向きあった。

1995年1月17日午前5時46分、小田は芦屋近くの西宮市の集合住宅で被災した。本書は、その被災からの1年間に書かれた小田実による怒りの記録である。驚かされるのは、そこで「告発」される事態のあまりの「変わらなさ」だ。小田の「人生の同行者」（彼は連れあいをこう呼んでいる）のアボジの災害関連死、おにぎりとパンが続く野菜不足の避難所の粗末な食事、事が起ってからしたり顔に構造物の危険性を説明する研究者、被災者の援助のために必要だとされる「査定」の煩雑な書類と手続き。これらはいずれも、私たちが阪神・淡路大震災から20年以上、東日本大震災の被災地においても、いずれの被災地においても、深い溜息を吐き出し続けてきたものに他ならない。なぜ変わらないのか。何が変わっていないのか。私たちが本書を読んで抱く同様の問いを、参照点は違えこそ小田も抱えていたに違いない。それ故に小田は本書において、阪神淡路大震災「後」だけでなく、戦「後」日本もふりかえることになる。

４．難死の思想とは何か

なぜ、阪神・淡路大震災と、戦後がつながるのか。小田はそこに繰り返されてきた加害性の忘却を見る。60年安保と70年安保には、前者が日本の「防衛」に主眼が置かれていたのに対し、後者は実際に日本の基地から飛び立ったアメリカの戦闘機がベトナムの人々を殺戮するという「攻撃」が問われたという違いがあった。そして震災前の90年安保が、70年安保から20年ではなく、60年安保から30年とふりかえられたことに小田は注目する。ベトナム戦争において、日本は間接的とはいえ、間違いなくアメリカによるベトナムへの攻撃の一翼を担っていた。このような加害性が忘却されるのは、もちろん、根本において、日本が先の戦争における自らの加害性を向きあわなかったからだ。それは、昭和天皇による終戦詔勅において、「米英二国ニ宣戦セル所以モ亦実ニ帝国ノ自存ト東亜ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他国ノ主権ヲ

排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス」、「朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス」というように、正義の解放戦争であったという文言が巧みに盛り込まれていることからも明らかだと小田はいう。そして、この終戦詔勅が、戦後の左翼の威勢が良かった時期にさえあまり省みられることがなかったことに、加害性の忘却性の根深さを見てとるのだ。

あの戦争で日本を何度も襲った空襲のことは、戦後教育を受けてきた私たちも、学校であるいはまだ身近に存在し得たあの爆撃の中を逃げさまよっていた近親者から直接聞くことが出来た。戦争でこんなに悲惨な目に遭った、だから二度と戦争はいけないのだと。このようなメッセージを戦後の日本は繰り返し自らに言い聞かせてきた。ところが、日本は空襲の被害を受けただけではない。

小田は娘の小学校の教科書に採録されていた「ちいちゃんのかげおくり」と題した文章を紹介する。ちいちゃんは出征した父を思いながら、むかし、父と母と兄と「かげおくり」をしたことを思い出す。「かげおくり」とは、影法師をじっと見つめてそのまま空を見上げると、そこに自分の影法師が残像となって見えるという遊びで、父が教えてくれたものだ。空襲が始まり、ちいちゃんは母と兄とはぐれてしまう。いつまでたっても帰ってこない母と兄を防空壕で待ちわびながら、ついにちいちゃんは飢え死にをする。死の間際に彼女が見たのは、父と母と兄と眺めていた「かげおくり」の幻影だった。

小田はこの話につづいて、もうひとつの「ちいちゃんのかげおくり」が載せられていたら、という。それは、中国の「ちいちゃんのかげおくり」だ。中国本土では、日本軍による空襲があった。この日本軍による中国空襲は、日本の「被害」としての空襲ほど知られているわけではない。中国の「ちいちゃん」も出征した父を思いながら「かげおくり」をし、防空壕の中で帰らぬ母と兄を待ったはずだ。小田は、繰り返し「中国のちいちゃん」を想起せよという。「被害」があるところには、必ず「加害」がある。この「被害－加害」の連関をみることが重要なのであり、それこそが「被害－加害」の連鎖を断ち切ることにつながっていくのだと。

本書のタイトルにもなっている「難死」を考える際にも、小田はこの「被害－加害」の連関でみることが重要だという。「難死」とは、小田の造語であり、このような形で人間は殺されてはならないと感じられる死のことである。それは、あの戦争で虫けらのようにころがっていた死体のように「あまりに悲惨」であり、日本の敗戦が濃厚であった戦争末期の、例えば8月14日の空襲で失われた命のように「まったく無意味」であり、そして応戦する戦闘機も飛ばない中で爆撃をうける「一方的な殺戮」における死である。そして、小田は、阪神・淡路大震災における死も全く同様に「難死」であったという。この豊かな「先進国」「経済大国」で、なぜ、かくも大量の人間が悲惨に、無意味に、一方的に殺されて死なければならなかったのかと。そう、小田はここで「殺されて」と述べている。小田にとっての阪神・淡路大震災は天災ではない、明確な人災として存在しているからだ。

５．人災／加害の構造

阪神・淡路大震災が人災であったというのならば、加害者は誰なのか。小田の答えは明瞭だ。それは「政官財学文の癒着」である。つまり、地震前には土建屋と結託し乱開発を続けて街を災害に脆弱なものとし、地震の2日後には、未だ多くの人が生き埋めになっていたかもしれないタイミングで「これからは人命救助より復興だ」と公言する政治家の「政」であり、株式会社と呼ばれ、市民の福祉安全を軽視して、災害対策にろくな予算もつけずに、乱開発を進めた「官」であり、これらと結託して利益を得てきた「財」であり、自らの責任に無自覚で、悲劇を良い機会に「これからは危機管理だ」と気炎を上げる防災学者の「学」であり、人々が未だ避難所で1日2回のパンやおにぎりの食事をしている時期に「復興は花より団子になりがちだが、花が大切、団子は食べたらなくなるが花は実をむすぶ」と言った作家の「文」である。この「政官財学文の癒着」が、震災において多くの人々を「難死」の犠牲とし、生き延びた人々を「棄民」として追いやっているのだと。

室崎益輝氏は、日本の災害復興に根強い「原形復旧主義」があるのは、「復興」には反省を伴うからだと述べている。脆弱な土地を切り開いたために被害を拡大させてしまった、だから災害前より安全な場所にまちをつくろうとすることは、災害前のまちづくりに誤りを認め反省することになる。反省には責任が伴う、その責任を回避するためには、ただ災害前の状態に戻すことを確実に続ければよい。こうして日本は何度災害に見舞われてもその反省を回避してきた。

だから、阪神・淡路大進震災における「政官財学文の癒着」が、十分に反省されてこなかったのも、

残念ながら驚くに値しない。むしろ驚かされるのは、「政官財学文」のように羅列された言葉の意味に、たった20年の間にこれほどもの反転が生じたのかということだ。「産官学民」「官民協働」「産学連携」、いずれをとっても、現在では否定的というよりも、むしろ肯定的な意味合いで、積極的に推し進められていくべき事柄として扱われている。しかし、私たちは、もう少し慎重にならなければいけなかったのではないか。

６．小田実のふたつの顔

このように、小田実は本書において、阪神・淡路大震災における加害の構造を暴いていく。そして、なかでも国家に対して、その責任を追及していく。例えば、義援金の分配の基準や認定の問題について、基本的な問題はそもそもこうしたお金は行政側が自ら出すべきお金だったのではないかと主張する。大災害に遭った人たちを救うのは国家の責任なのではないか。このような主張、行動が、やがて被災者生活再建支援法へと結実していく。

ここで、特に小田実の他の著作を知っている人間にとって、小田実には、ふたつの顔があったのではないかと思わせるものがある。ひとつは、今でいう「バックパッカー」の走りとして、片道切符をもって世界を流れて旅をする、「何でも見てやろう」（小田, 1961）に代表されるようなコスモポリタンとしての小田実である。もうひとつは、本書で見られるように、大震災の被害に対して、その救済について国家の責任を厳しく追及する小田実である。ここでの疑問は、本来、「人生の無銭旅行者」（何でも見てやろう）として、国境を含むあらゆる境界をこえて、ひとりひとりの名前を持った人間と対峙しようとした小田実が、なぜ国家と向きあおうとしたのかという問いだ。国家を抜け出ていこうとするベクトルと国家に向かっていくふたつのベクトルがここには存在しないだろうか。

例えば、本書には、「『われ＝われ＝われ・・・』の『共生』」と題された一節がある。ひとりひとりの「われ」のつながりを考えるときに、日本語には「われわれ」と「われら」という二つの表現がある。「われ＝われ＝われ・・・」における「われ」はそれぞれに異質の価値をもった「われ」の共生である。それは、異なる価値観を退けないという意味で「開放形」であり、「われ＝われ＝われ・・・」の連なりの先にあるのが「市民社会」だ。それに対して、同一の価値に基づいて集団を形成するのが閉鎖形としての「われら」であり、「国家」だという。もちろん、小田はここで、前者を肯定的なものとして、「われ＝われ＝われ・・・の共生」の可能性を論じている。

このような理想像をもちながら、一方で国家の責任を追及し、見方によっては国家への深い依存ともいえる態度を留保しておくことは、矛盾しているのではないだろうか。論者によっては、国家の揚棄と十分に向き合えていない中途半端な左翼と評価されるのかもしれない。しかし、私はこの矛盾にこそ、このふたつの顔をあの大きなひとつの顔に併せ持ったことにこそに、小田実のらしさを見出すし、「共生」ということを考える際に、実践的に避けては通れない重要な問題があるのではないかと考える。

本書で、小田は、あの震災で脚光を浴びたボランティアに警鐘を鳴らしている。それは、ボランティア自身に向けられた問題ではない。ボランティア活動が、政治の怠慢、行政の無責任を隠蔽する楯として使われてしまわないだろうかという問題だ。ボランティアが国家の不備の隠れ蓑になっていないか、国家の無準備、無責任、無能力、無意欲、棄民の隠蔽の楯として使われないかという危惧である。

20年たってみて、ボランティアの現場はどうだろうか。ボランティアの活動に制限が加えられるとき、炊き出しの活動に制限が加えられるとき、避難所の支援に制限が限られるとき、私たちはボランティア元年を経た今だからこそ、もう一度、国家の役割を問わなければいけないのではないか。土砂にまみれて住めなくなった家を住めるようにするのは本来誰の仕事であったのか、避難所であたたかな食事で体を休められるようにするのは本来誰の仕事であったのかを。この人間の命と尊厳を守るということをあまりにも安易に誰かの善意に委ねてはいないだろうかということを。

市民の自由な意思に基づく助けあいと国家あるいはそれに代わる何らかの行政体による公的扶助との関係の問題は、災害時にも、平時にも、あるいは日本に限らずに世界中で見られるようになってきた問題である。冒頭の、「私は、ダニエル・ブレイク」をもう一度思い出してほしい。フード・バンクは素晴らしい活動だ。けれど、ケイティを支えるものは、果たしてフード・バンクだけでいいのだろうか。そして、この問いは、再び形を変えて日本に跳ね返ってくる。子ども食堂は素晴らしい活動だ、けれど果たして子ども食堂だけでいいのか。そして…。こうして問いは乱反射していく。

多様な価値をもって生きるひとりひとりの「私」たちが共生することを可能にする条件は何か。明らかなのは、ひとりひとりの市民の自由な意思による助けあいだけでは、その共生を十全に可能にするとは言えないことだ。小田実が論じた阪神・淡路大震災においてもそうだったし、その後の災害においても同様だ。また、平時の社会をみても、「私は、ダニエル・ブレイク」が象徴的に描くように、個人の助けあいには希望もあれば限界もある。ひとりひとりの市民の自由な意思を尊重しつつも、そこからこぼれ落ちることがない社会はどのように可能なのだろうか。そこで国家はどのような役割を果たすのか。あるいは、国家に代わるものを準備しなければならないのか。災害と共生にとって避けては通れない問題がここにある。

左翼の明らかな減退を前にして、今では小田実は過去の人という印象もあるかもしれない。また、正直なところ、けっこう「色がついている」人物といういう印象もあるかもしれない。けれど、本書を読んでみれば、その主張の妥当さに今も揺るぎないものがあること、むしろ小田の主張が古びずに存在し続けることへの疑問を感じざるをえないだろう。

補注

(1) ケイティが最後の手段を選ばざるを得なくなった理由やその手段、そしてダニエルが迎える結末については、直接映画をご覧になって頂きたい。

参考文献

小田実（1961）．何でも見てやろう 河出書房新社